

統制下の土木請負雑考

副會員 勝海恭次郎*

東安の山の中から國都へ出て来て既う一年になんなんとしてゐる。流石に刺戟の多い都會の事である、私の空つぼの頭の中にも何か溜つたらしい気がする、久振りでペンを取つたら首題の件の様な誠に取留のない雑考やうのものが出来上つた、之も鶏助の一つであらうか、若し此の様なもので紙の余白が埋められれば初陣の編輯委員として幸である。

請負業は何處へ行く

現在の決戦態勢下では「此の一戦、何かなんでも勝抜くぞ！」と云ふ國家總力戦の目標の下に戦時計畫經濟が強力に押進められ、物の統制が益々進展強化するに連れ企業の目的が總力戦の意圖に近いゆゑに依つて必要な資材の配給に等級別が加へられて、量的にも時間的にも相違するのを免れない事になつた。

之はまた政府の執行に係る事業に於ても同様のブレーキを受けるので、土木事業の如き従來の慣習上稍々もすれは平和事業の如く見做され易い性格のものにあつては假令目的が緊急必需品の生産擴充に、又國防國家の建設に直接に寄與する場合でも工事用資材の獲得に就ては之を在來つ如く請負業者に一任、又は單なる斡旋の程度では入手が難かしく、到底限られた期間内に工事の完成する見透しがつかないので、官自らか夫々の關係機關に接觸し複雑なる手数を煩して取得に奔走し、主要器具機械の類は貸與、資材は官給として業者に支給して共に工事の進捗を圖らねばならなくなつて來たばかりか、更に本年度の勞需關係、すなはち緊急必需品の生産擴充と食糧のアウトターキー促進に對する礦工農部門への勞務者割當及び國際情勢の急變に即應する軍の臨戦態勢強化への供出勞務者の急増等をして依然として制壓される國外勞

務者の入國制限と云ふ様な點から、大戦第二年を迎へる來年度の勞需關係は一層逼迫し、業者の認可募集の程度では本年同様殆ど需要數量に到達し得ない事は明かなので、この面にも亦官自らか獲得に奔走し、本年既に一部の實施を見た縣族供出の勤率勞務者を大部分に亘つて使用せねばならぬ事になり、そして斯かる供出勞務者の立前として之を業者の利潤の對象に置くことが出来ない、官の直役として總てを處理しなければならず企業者たる官の負擔は益々増加して來たのである。尙夫れに加へて勞務者、器機の私及び工事資材等の配法に就ても、統制輸送の嚴然たる今日では官が貨車の獲得にまで乗出してゐる始末である。

斯様に統制經濟下では企業者側たる官の責任負擔が非常に増大するに反して業者の負擔は著しく軽減され、僅かに供出勞務者の作業指導と生活斡旋だけが残された範圍と云ふことになる。即ち時局は官が好むと好まざるとを問はず工事の直營施行を強ひてゐるものと官へよう。但し之は時局の余りにも先走りであつて、現實の問題として人的資源の不足の折から、巨額の土木事業の全面に亘つて直に直營施行に移行する事は全く不可能であり、相當の準備期間を必要とする、又假令可能であるとしても政府の土木事業を唯一の對象とし、建國以來共運の彈丸を送り辛酸を嘗めて來た多數の土木請負業者の死活問題にも關係するので、爲政者の立場として簡単に斷行することも出来ないであらう。

併し僅かに勞務者の作業指導と生活斡旋の範圍では其の利潤も極めて些少であつて、到底従來の經營組織其の儘を繼續していく事は至難である。此處に業者の生きる悩みがあらう。だが、今日は世界の國家群が新しき歴史

へ轉換する激流期であつて、舊體制の反抗も苦悶も何等の威力と同情を有しない、徒らに過去の夢を追ふのは愚である、須らく時代の要請する新しき性格と機構をもつ経営形態を創造して再出發すべきではあるまいか。

請負改稱

P 判つたよ、馬鹿に經濟語を入れて捲し立てるじやないか近頃經濟の本でも讀むのか。

K 時局柄一寸はね

P だが、政府の土木工事ばかりが仕事でもなく、又生きる總てでもあるまい、夫に既に相當の儲を儲むてゐる筈だ、内地の中小商工業者の轉業問題よりは簡單だと想ふ、來年からは是非直營に換へるんだね。

俺の様に〇〇の奥地から此の新京まで勞務者の食糧獲得やら工事機械の借用にまで出向いてゐるんだから、之では全く業者の代人と云ふ處だ、夫も良いが切角奔走して品物が遅れれば、業者には補償金と云ふ手が控へてゐるから、君と此處でコーヒーを飲むて居ても氣が氣でない。

K 人の解決さへつけば直に直營も良い、だが舊體制では意味がない、新體制で行くべきだ。概そ官吏の直營位非能率的なものはないからね、例へば勞働法の買金統制規則に據る工事單位作業量當買金法を極端に利用した切拔式直營法でいくとか、又は工事の工種別に對し勞務者を供出縣族毎に割當て、其の縣族の代表者と班長に工事設計書を内示して豫算範圍に工事が完成した場合には、其の差額を能率向上の獎勵金として代表者に交付する様にする、そして代表者は該作業に従事した勞務者に交付金の70%を配當し、残りの30%は供出屯の勞務者數に按分して其の屯の要路資金として支給する、と言つた所謂獎勵金付作業法などを採用する。

P 成程、言ふだけあつて中央の机上論かと思つたら、可成り突込むで考へてゐる處は感心する、俺も其の點に就ては相當に考へてゐる積りだが、例へば現場擔當者の内、雇員以下の年末ボーナスを工事成績に照して最高1,000圓位までの高率支給の出来る様に考慮する、そして下級幹部の勞務者指導能率の向上を圖るんだ、直接勞務者の指導に當る者がベストを畫す様に仕向ける事が能

率的直營工事遂行の絶對必要條件だからね。

夫からも一つある、御承知の通り滿洲國は彩票の國だ、其處で勞務者の能率向上に彩票を利用する。此の彩票は滿系の民族性と供出勞務者の通有性たる歸郷性を巧に捉へたもので、名稱は賞金付歸國彩票とでも云ふか、即ち彩票の條件は勞務者が就勞後2ヶ月目から毎月1回抽籤するのだが、この彩票は月並の金で賣るのではなくして勞務者の作業成績と勤務狀態を調査して優秀者のみただ遣る、成績に依つて1月に10枚位まで遣る様にする。頭彩は勞務獎勵金200圓、2彩は100圓、3彩は無しで何れも歸郷許可、3彩以下は獎勵金で適當な額とする、と言つた様な方法なのだが何うか。

K 夫は確に面白い、興農部あたりに交渉すれば出來ないことはない、來年勸業公局が設けられ、そして兵役に服せざる不適格者からなる勸業奉公隊員が各縣族に編成され、國策事業には應援參加すると云ふことになるさうだが、初年度や次年度では其の數も少く、従つて當分の間は供出勞務者の御厄介にならなければなるまいから君の彩票式勞務能率向上法は大いに買つていいと思ふ、併し或人は供出勞務者と雖、國家意識の涵養を目途とする勸業奉公にあるのであるから、歸國彩票など以外の外であると云ふかも知らぬ、だが精神教育と建設とは自から違ふ處がある、滿系所謂五千年の歴史を持つ漢民族の民族性を、然も眞に一字無き者が大部分を占めてゐる彼等を一朝の教育や指導に依つて陶冶し、現在の滿洲國建國精神を補付しようと云ふことは單なる一つの理想にしめ過ぎない、少くとも健全なる政治の下に三四世紀の自然の時の流が必要だと想ふ。

寧ろ今日では單に彼等の中に抱懐流布されてゐる供出勸業に對する危惧の念を免除して相當の報酬もあり、安心して然も家庭の徒食の子弟は進んで参加しようと思ふ供出に對する理解を與へる事で十分ではなからうか。

其の意味に於て君の提案する彩票利用は頗る効果的なのだ。

P 彼等に朝禮を執らしめ、綱領を叫ばしめて、それで建國精神が發揚すると想つたら大きな錯誤だからね、無智な人間の教育には紙芝居かイソップ式の偶話の方が

はるかに効き目があるだろう。

K まあ窓口は止めよう、ウツカリすると増産停止と来るからね・・・・・・

要するに直営工事が可能になれば色々の旨い案が考へ出されるであらうが、轟にも言つた通り來年では概そ出來ない相談だ、では何うするかと尋くかも知れぬが、僕は業者の長所を探り入れた半直營式でいくべきだと思つてゐる。即ち自由主義經濟時代の總の企業の形態は、利潤の飽くなき追求を唯一の目的として組織されたものだ

この一貫した方針の下に組立てられた業者の施工要領と作業指導の妙味は、無理無駄の多い吾々官僚の到底追従を許さぬ處で、この點は新體制に邁進する今日と雖十分高く評價してやつて良い、此の長所を官僚直營に巧みに採入れ様と云ふのが僕の言ふ半直營式の規で、同時に此處に業者の生きるべき道があるのではないかと想ふのだ。

俱體的に言へば官と業者が一體になり協力して國策事業たる土木工事の完遂に努めると云ふ形を探るので、業者は官と協定に依る勞務者の作業指導と生活斡旋を含むた勞務管理の範圍を分擔する、勿論勞務管理の條件は協定に依り一定の豫算範圍を取極めておく事は云ふまでもない。同時に官は業者に對し協力條件として業者の必要經費と報酬金の交付を約束する。此處が實際問題として難かしい處だが、必要經費の點は興信所調書、税捐局調査書などを參酌することに依つて略々實際に近いところが求められるであらうし、又報酬金の點は現在の會計法に準加して貰はねばならぬ處と想ふが、之は在來の請負間接費中の純益金に相當するものと云ふ見解から其の額を決める事は、さして至難な問題ではない、少くとも商品の卸値と小賣値が法令で定められると云ふ傳家の賣刀が物を言ふ今日では難かしい事ではないと想ふ。

P 君の言ふのは曾て米國あたりで提唱されてゐた實費報酬請負制と軌を同くするのではないか。

K 外面的には同様に見へるが内容は違ふ。』

この場合、業者は工事の請負をやつてゐるのではない、單に勞務管理を引受けてゐるに過ぎない、そして報酬の對象は作業指導の如何に懸かつてゐる。だから既に請負

と云ふ名稱は妥當ではない。

P では勞務管理者か、施工者と改稱するか。

請負の諸費を探る

吾々が不可解としてゐるもの一つに請負業者の諸費がある。所謂工事間接費中の請負間接費と云ふ奴である。近頃の様設計豫算書の内容が時代の計費經濟を反映して、原價計算的の行方をする様になつて來ると、在來のような余りにも漠然とした考へ方は許されない事になる。では一體何んな内容と組織から成立つてゐるものか、此の頃之が分析を始めてみた。

データは請負會社に居る友人から提供して貰ひ、之を色々と勘案した擧句、大體次の様なものに纏めてみた。

一 假定條件

1. 請負條件

請負金額	700,000圓
工事材料	官給
工事期間	5 個月

2. 請負業の資格

資本金30萬圓株式全額拂込 利益配當 年10%

1 年間の總請負額 例年の年均は 3,500,000圓

投資額 事務所造作、諸什器及び工用器具機械の類 100,000圓

3. 本店の經營狀態

事務所及び倉庫借上費 月額 350圓

社員 重役2名 普通社員8名 運轉手2名及び雜役3名

2 應積自貨物自動車2台 自轉車3台

4. 請負側負擔の施設

現場驛附近の臨時出張所 請入家屋内部改造の上借上現場詰所 木造巾6米、長16米。

器材倉庫 アンペラ造巾6米、長20米。

5. 請負側現場従業員

普通社員3名 世話役6名 運轉手1名 雜役3名 (勞務者出場數1日 800~1,000名を算定)

6. 請負持込器具機械

圓スコ200個 練スコ60個 鍬100個 鋤150個 ランザ (撥棒共) 500組 其他小道具J式 (以上の内

新規購入3,000圓)

2 地貨物自動車1台

7. 輸送

持込器具機械の輸送 新京～佳木斯間30地貨車を往復にて4台

本店～發碑(5軒)及び龍碑～現場(10軒)輸送は何れも貨物自動車にて運搬

二 雜費の内容

1. 税金

2. 土建協會納金

3. 株券配當額の分擔

4. 投資額金利の分擔

5. 融通資金の金利

6. 本店經營費の分擔

7. 出張所借上及び内部改造費

8. 現場詰所及び器材倉庫建築費

9. 現場従業員人件費

10. 現場事務費

11. 器具機械原價消却費

12. 輸送費

13. 土地借上費

14. 機密及び雜費

三 雜費の算出

1. 税金

a 所得税

事業所得は必要經費を控除した金額が1萬圓を超える場合は其の $1/100$ 、5萬圓を超える場合は $16/100$ 、10萬圓を超える場合は $18/100$

今、必要經費を控除した額を請負金額の10%として所得税を算出すれば

$$700,000 \times 0.1 \times 0.16 = 11,200 \text{圓}$$

b 地方税

附加税 正税の $50/100$ とすれば5,600圓

雜税 本税は本店と出張所に分けて算出

2. 土建協會納金

請負金額の $6/1,000$ とすれば 4,200圓

3. 株券配當額の分擔

拂込金額300,000圓に対する利益配當を年10%とすれば、配當額は30,000圓となり、之に対する當該請負額の負擔金額は年總營業額に対する按分比率として求める

$$700,000 + 3,500,000 \times 30,000 = 6,000 \text{圓}$$

4. 投資額金利の分擔

投資金額に対する年金利を10%とすれば10,000圓にして、之の分擔額は前項同様の方法により算出すれば 2,000圓

5. 融通資金の金利

本金利は工事契約まで立替拂金額に対するものなるも前渡金の金利と相殺するものとして計上せず

6. 本店經營費の分擔

a 人件費

重役給料月額 600圓 年7,200圓 2名で14,400圓

同 賞與 年 70% は 5,040圓 2名で10,080圓

普通社員給料(日系6名、鮮系1名、滿系1名)

月額平均1名當り 200圓 年 8名で19,200圓

同 賞與 年 60% 8名で11,520圓

運轉手給料(鮮系2名)月額平均1名當り 110圓

年 2名で 2,640圓

同 賞與 年40% 2名で 956圓

雜役給料(滿系3名)月額平均1名當り 60圓

年 3名で 2,160圓

同 賞與 年30% 3名で 648圓

給料及び賞與 計 61,604圓

重役旅費 1名當り月10日年120日の出張とし、

旅費は1日當り汽車賃を含み40圓とすれば

年 2名で 9,600圓

普通社員旅費 平均1名當り月8日年96日の出張

とし、旅費は1日當り汽車賃を含み 25圓 とすれば

年 8名で19,200圓

旅 費 計 29,800圓

人件雜費(退職金其の他)年額 2,000圓

人件費合計 92,404圓

b 營業機密費

交際費其の他 年額に於て 10,000圓

c 事務所及び倉庫借上費		同 賞與 年50%	7名で 5,040圓
月額 350圓	年 4,200圓	同 現場手當月額平均1名當り70圓	7ヶ月分 7名で 3,430圓
d 事務費		運轉手給料(鮮系1名)月額 110圓	年 1,320圓
筆墨紙、通信、電話、電燈、瓦斯水道等平均月額 250圓とすれば	年 3,000圓	同 賞與 年40%	528圓
e 薪炭費		同 現場手當月額50圓	7ヶ月分 350圓
冬季6月分とし月當り石炭消費量平均4噸、地當り25圓とすれば	年 60圓	雜役給料(鮮系3名)月額平均1名當り60圓	7ヶ月分(用済解雇)3名で 1,260圓
f 貨物自動車及び自轉車費		同 解雇手當平均1名當り30圓	3名で 90圓
貨物自動車は燃料維持修理原價消却費共年額3,000圓、地方雜稅70圓	2台にて 6,140圓	給料、賞與及び現場手當計	36,538圓
自轉車は維持修理費年額60圓、地方雜稅2圓42	3台にて 187.2圓	普通社員旅費 平均1名當り月8日全56日の出張とし、旅費は1日當り汽車賃を含み25圓とすれば	3名にて 計4,300圓
g 勞務與國會費		世話役級旅費 平均1名當り月5日全85日の出張とし、旅費は1日當り汽車賃を含み18圓とすれば	7名にて 4,410圓
第3種 資本金の1/10,000	300圓	旅 費	計 8,710圓
本店經費合計	116,831圓	合 計	45,248圓
本店經營費の分擔額は曩と同様、年總營業額に對する按分比率として求める		10. 現場事務費	
$7(10,000 \div 3,500,000 \times 116,831 = 22,966.2圓)$		筆墨紙、通信、電話、電燈、薪炭等平均月額 200圓	とすれば7ヶ月分にて 1,400圓
即ち23,000圓		貨車自動車は燃料維持修理及び原價消却費共年額、3,000圓 地方雜稅70圓を入れ7ヶ月分を割當れば	1台にて 1,800圓
7. 出張所借上及び内部改造費		11. 器具機械原價消却費	
借上費 月額 100圓 借上期間7ヶ月で	700圓	持込器具機械の新規購入見償代價を全部にて	8,000圓とし、消却率を50%とすれば 4,000圓
内部改造費	1,200圓	12. 輸送費	
8. 現場詰所及び器材倉庫建築費		持込器具機械の輸送 新京一佳木斯間20噸貨車1台	600圓とし往復4台にて 2,400圓
現場詰所 木造 6×16米にして建坪96平米、平米當りの建築費を80圓とすれば	7,680圓	本店一發驛及び瀋陽一現場間の小運搬は自家用貨物自動車に據るものとし、全往復3回、1回當り8圓(燃料及び積卸手間)とすれば	240圓
器材倉庫 アシベラ造 6×20米にして建坪120平米、平米當りの建築費を30圓とすれば	3,600圓	13. 土地借上費	
内工事完成後の回收費を30%とすれば差引	6,190圓	翌年他工事使用のため、残材集積場借上とし、期間6ヶ月、平米當り月3錢、3,500平米にて	450圓
9. 現場従業員人件費		14. 機密及び雜費	
普通社員給料(日系)月額平均1名當り	200圓年		
3名で	7,200圓		
同 賞與 年70%	3名で 5,140圓		
同 現場手當月額平均1名當り100圓	7ヶ月分		
3名で	2,100圓		
世話役級給料(日系4名、鮮系3名)月額平均1名當り120圓	年7名で 10,080圓		

調査費	月額平均 300圓	7ヶ月分にて	2,100圓
雑費	月額平均 150圓	7ヶ月分にて	1,050圓
起工及び竣工式費			3,000圓
以上諸費總計			131,784圓

之を請負額 700,000圓に對する比率で示せば 17.4%に當る事になる、尙諸費に對する内譯の割合は次の様になる。

諸費内譯	金額	諸費に對する比率	請負額に對する概算比率
1. 税金	16,800圓	13.8%	2.4%
2. 土建協會納金	4,200	3.4	0.6
3. 株券配當額の分擔	6,000	5.0	0.9
4. 投資額金利の分擔	2,000	1.7	0.3
5. 融通資金の金利	相殺	—	—
6. 本店經營費の分擔	23,900	19.0	3.3
7. 出張所借上及び内部改造費	1,900	1.6	0.7
8. 現場事務所及び倉庫建築費	6,196	5.1	0.84
9. 現場従業員人件費	45,248	37.0	6.5
10. 現場事務費	3,200	2.6	0.45
11. 器具機材原價消却費	4,000	3.3	0.58
12. 輸送費	2,640	2.2	0.34

13. 土地借上費	450	0.3	0.06
14. 調査及び雑費	6,150	5.0	0.88
計	121,784圓	100%	17.4%

上に挙げた諸費の値は可成余裕があるのではないかと想ふ。今純利益を8%として、之に加へると全體でまづ25%と云ふ値になる。近頃公報に掲げてある一般商品の卸値と小賣値との開きも概そ25%位になつてゐる處をみると、筆者の考へ方も萬更ではない様気がする。

尤も小賣商と土木請負とは性格が全然異なり、後者は多分に危険性を含むのである。そこで業者が見積の際、算盤の中に入れる此の危険率を5%として考へれば、差引請負金額の70%が業者の計上する純工事費と云ふ事になる。

こんな事を演譯して行くと、次の様なことも考へられて来る。即ち吾々の作製した設計算書書の官給材料代を控除した金額と、總の請負金額とが一致してゐるとし、そして吾々は豫算を組む場合に請負の諸費に相當する雜費を略々10%と見做して計上したとすれば、吾々の歩掛に依つて作られた純工事費は90%だと云ふ事になり、従つて請負歩掛と云ふものは吾々の官廳歩掛より概そ2割安であると云ふ見當がつく。

埋草を御願ひする

先頃、此の會誌の編輯委員と云ふ名譽職の様なものに推され、利さへ編輯擔當者まで引受けて了つた。實は來に歸つてから讀讀しに格好であるし、校正の悪人の論文を誰か適でも丹念に讀まなければならない、よき刺戟、よき勉勵であると思つて、内心自ら進んでゐたのであるが、其の暇斯ふした定期刊行物には期日と云ふ厳確な約束のあるのをウツカリ忘れてゐたのは大きな失策であつた。

いざ實際にたづまわつてゐるに際して仕事どころではない、中々忙しい一人一役はたつぷり有る。校正文ならまだ良いとして、埋草にかかつては寧ろ苦痛の種である。昔の様に外國雜誌でも豊富に入る時なら問題ではなかつたのであるが今日では一つの埋草を作るにも非常な精神勞働を必要とする。短かくとも全くの創作である、と言つて放つて置けば印刷物の體裁が悪い、第一間が抜けてゐる、夫れに此の配給時代に餘白の有るのは、如何にも勿體ないし、今頃の査定量にも影響があるので氣が氣でない、だから是非でも埋草を作らなければならない。

そこで會員諸君に埋草を御願ひするのだが、原稿用紙2枚位で題は何んでも良い、直到臭いなら體文でも結構である、前號の「石炭の力」、本號の「若き畫家の死と豚」や「お米・お米」お米など何入でも埋草になる一例を挙げた積りである、是非寄稿して欲しい、鶴首して待つてゐる。

かつち